裸の騎士と眠り姫

佐江衆一

著者略歴

昭和九年東京浅草に生まる。文化学院卒。昭和三六年「背」で新潮同人雑誌賞を受賞、「蘭」「すばらしい空」等で五たび芥川賞候補となる。

著書に、「鼠どもへの訴状」「闇の向うへ跳ぶ者は」「太陽よ、怒りを照らせ」などがある。

裸の騎士と眠り姫

昭和四九年七月三〇日第一刷

著者　佐江衆一

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話（〇三）二六五一一二一一

振替口座東京七八七四三番

印刷所　共同印刷

製本所　大口製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Shuich Sae 1974 Printed in Japan

裸の騎士と眠り姫　目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

裸の騎士　7
小人の口上　169
眠り姫の便器　199

裝

幀

司

修

裸の騎士と眠り姫

裸の騎士

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

——人間にもカビが生えるものですか？

——カビが生えるようになってはオシマイだね。

老医師はみごとな薬罐頭をもたげると、皮膚の裏側まで見とおせそうな金壺眼をぎょろりとひからせ、軟体動物さながらの薄赤い舌をぺろりとたらして笑いとばした。

——ハッハッハッ。睾害だね。

——え、公害ですか？

——そのピチッとしたパンツもいけないんだ。石油なんぞからつくった繊維が人間の皮膚にいいはずがないよ。

——そういうものですか。

——カッコいいだけで汗をすいとらない。そこがすれて、妙な電気がおきたり、まあ、悪の温床だ。さあ、もっとぐっとさげて。

――……。

――うむう、こりゃあ重症だ。痒いでしょう？

――ええ、ひどく痒いですね。腹をたてたときなんか特に。

――興奮すると体温があがるから、菌の活動がいっそう活発になるんだよ、ハッハッハッ。風とおしのよい猿股をはくことだね。昔風の綿のものを。あれがいいんだ。こういう娘っ子がはくみたいなパンティ式の、特に色ものはダメだね。ひどくなるばかりだよ。

――……女房にすすめられたものですから、つい……。

――奥さんだって困るでしょう、亭主にカビなんぞ生やされちゃあ。

――……ええ、まあ……。

――当節の若い者は、たいていブツブツをつくっている。あんたなんか猿股だよ。純綿のダブダブしたやつ。あれに限るね。

――はあ。……で、治りますか？

――風通しをよくして日光に当てるのが一ばんだが、わしが特別に調合した軟膏をあげるから根気よくつけてごらん。治ったと油断してやめてはだめだよ、すぐにでてくるから。なにしろ頑固な新種のカビだからね、すぐにまたでてくる。シイタケみたいなものだよ。

――シイタケなら食べられますけどね。

塩見昭太郎は、哀れな冗談を弱よわしく口にした。

その診療室の衝立のむこう側では、五、六人の患者がじっとおし黙って、なまめかしい赤い光線に顔や手足をさらしていた。ニキビや水虫や、薄桃色の何んだかわけのわからない吹出物の治療にきている若いOLやサラリーマンだった。昭太郎は、いかなる性悪なカビのなかでも一人だけ生きのびそうな、口の悪い、しかし人柄はすこぶる好さそうな禿げ頭の老医師へできるかぎり低いささやき声で話していたのだが、二人の会話が、電気を根気よくかけている患者たちへばかりでなく狭い待合室にぎっしり並んで番を待っている人たちにまで、すべてつつぬけであったと顔面が熱くなった。しかし、誰もが目と耳を盗まれてしまった人間のように、ひとりとして昭太郎へ関心をはらう者はいなかった。そこで彼は、ここにいる連中も一人残らず自分と同じように新種のカビがついているので、わざと知らん顔をしているのだな、と考えた。

しかし、塩見昭太郎はオフィス街にある皮膚科の医院をでると、足をはこぶたびにきっちり締めつけてくるカラーパンツと痒みのつのる患部のシイタケを気にしながら「人間、カビがつくようになっては、まったくオシマイだなあ」と力乏しくつぶやかないわけにはいかなかった。

その彼は、近ごろ歯科医へもいったが、それは一度でやめてしまったのだった。

——かなり重症です。

と歯科医は宣告した。

――……。

――さけがたい老化現象です。

――……。

――顎の骨までどんどん腐っていきますよ。

――……。

――手術をするか、ぜんぶ抜歯して義歯にすることですね。どちらをご希望ですか？

――……。

――簡単な手術ですよ。歯ぐきをきれいに剝がして、根元の腐っているところをガリガリ削りとるだけですから。

――……。

――最近アメリカで開発された技術で、削りとったあと歯ぐきを縫いあわせて、パテでしっかりおさえておくのです。三週間ほど歯ブラシは使えませんが、お酒だって飲んでもかまいません。大袈裟に考えこむことはありませんよ。

すると、ちょっと手を触れてみたくなるほど白衣の胸のもりあがった美人の看護婦が、昭太郎へではなく歯科医へよりそうようにして「痛くはありませんのよ」とクスクス笑った。歯科医は話しつづけた。

――パテをとったあと、歯ブラシを入念に正しく使うことが大切です。それには電動ハブ

ラシがいいんです。毎秒六十回ものスピードで上下に作動しますし、そのバイブレーションが歯ぐきをマッサージします。歯と歯の隙間のカスを完璧に除去する各種の替ブラシを使って、食事のあとと寝るまえに必ず磨いてください。これを実行しないと、痛い思いをしてせっかく手術をなさっても半年でもとにもどります。

――……。

――そうですねェ、やはり総入歯の方がいいかも知れませんね。どちらになさいます？

――……。

昭太郎が言葉を奪われていたのは、つぎつぎと新手の不意討ちのように襲ってくる驚きももちろんだったが、口を精いっぱい大きくこじあけられ、毛むくじゃらの太い指とピカピカひかる金属の器具をさしこまれていたので、否定とも肯定ともつかぬみっともないうめき声しかだせなかったからだ。彼は「老化現象」とか「歯ぐきを剝がす」とか「総入歯」などと脅迫されるたびに、ただ目をむいて、ほとんど寄り目のすさまじい形相で、シソーノーローの口臭を思いきり吹きかけてやりながら、すぐ顔のうえの歯科医を睨みつけた。しかし、白い帽子をかぶり、黒ブチのメガネと大きなマスクをかけている相手の、若造なのか年寄りなのかわからない、同情しているのか冷笑をうかべているのかもわからない、メガネの奥の逆三角に歪んだ二つの目玉しか見えなかった。

その診療室も待合室も高級美容院を思わせるインテリヤで、卵色の地に空色の花模様をあ

しらった壁にはスイスのレマン湖らしい古城のあるカラー写真が飾られ、静かで甘美なBGMが絶えずながれていた。ひんやりとする室内の空気には香水の香りまで漂っているのだった。さっきからクスクス笑っている看護婦はマリリン・モンローが素裸で白衣を着ているようだ。それに、彼が頼りなく三十度ほどの傾斜で寝かされている診療台は昔風の床屋の機械椅子のようではなく、うがいの設備と顔のうえの照明のほかはなにもなくて、ふんわりとしてしかも滑り落ちそうで、足をふんばる台もしがみつく肘かけもなかった。彼には見えない背のあたりに隠されているらしい恐ろしい電動ドリルなどの器具が、物質が蜂起するかのように飛びだしてくる仕掛けになっているのだった。

——入歯というのは、そうとう費用がかかるのでしょうね。

と昭太郎は、ようやく口がきけるようになったのでたずねた。オフィス街の新築ビルに豪華なサロン風の歯科医院を“DENTAL CLINIC”とわざわざ横文字の看板だけを掲げてかまえ、モンローみたいな肉体美の看護婦を傭っている以上、この年齢不詳の歯科医が白衣を着た貪欲な企業家としてたんまり儲けているにちがいない、とおびやかされたからだった。

——たいしたことはありませんよ。

と白衣の企業家は思いやりのある声をだした。

——これから長いあいだ、あなたが一生かけて毎日お使いになるのですから。

——それはそうでしょうが、およそどれくらいかかるものなのでしょうか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com